



語珠

天變奇談卷の中

地

の部

地

の部

東江樓主人纂輯

○地裂け或は陥る事

地裂け或は地下に陥つて池とあり又は湖

水とある等萬國とも小間々あるとあり

漢土の書冊ふは是等のおとを記する所の

多し或は國家滅亡する前兆杯と説たるも

のあまどども是ハ皆究理物語の地震と火山  
 の所あそりくさ如く地下ニ籠りける氣の  
 吹出んとまをども其出口あく遂ニ地表を  
 吹破るりのやり其時其地の様子より泥  
 の涌出るちとあり或ハ灰の如き物の出る  
 出とあり又或ハ地陥りて池とあり或ハ一  
 國變トて海とあり一あど古俗の語り傳ふ  
 るりの和漢西洋とも多し日本あそも



孝靈天皇の五年近江  
 の國ハ湖水溢て堪一  
 たりといひ傳ふれど  
 も是以て強て偽説と  
 ハ云難し夫地の体ハ  
 皆土石あり其間ハ  
 密実なる處あり又ハ  
 空虚なる所あり其出

堅き所あり弱濕の處あり其弱き  
 所の地中ニ空穴多きところ時あつて陥る  
 あとあり總て地の底ニ石多くして虚穴多  
 き地々地震多くす地の陥るあとも多し  
 といふ西洋の書よる大古國土あり一處今  
 海となり或ハ湖水と變じたるあつて所々小  
 見へあり

○平地突出或ハ山島湧出る事

平地突出るも山島湧出るも皆前みりへる  
 如く地中の氣吹出んとして土を揚げ堆阜  
 となすあつて田鼠の地中を行く時土を穿ち  
 て堆りくふもあつて如くあつて日  
 本年代紀にも景行天皇ノ十年江州ノ湖中  
 ニ竹生島始テ生ず舒明天皇ノ三年元  
 月伊豆ノ國ニ一島忽チ湧出ス杯とあり地  
 の堆阜を為し或ハ海中ノ島を造る等ハ西

三ノ  
 二ノ  
 一ノ

洋やうふる間々まゝの多おほあとりて是の大風おほいふよ  
 て波濤なとう海底の沙石せせきを漲たぎり来きて堆阜たいぶをたり  
 或あるは又地下の氣きよ由よるべし寛文年中けんぶんねんちゆう小  
 和泉塚わいずんづかの南方なんぽう洪波こうはふよつて沙石堆阜せせきたいぶを為  
 一今之を惠美酒島ゑいぶしじまと号なづけて廻船まわいせんの便たよりと  
 ても所ところあり去さまども何なにきも皆みな小島こじまあり日  
 本富士山ほんふじさん々々孝靈天皇かうりやうてんかうの五年ごねん小湧出こわきいたるよ  
 しいひ傳つたふれども是こゝ恐おそらくくの虚説きよせつありん



按おほる小上こじやう古國土ここくにち開ひらけ  
 ざる時ときを霧きりも深ふかく且かつ  
 人民じんみん少すくく遠方えんぽう他國たこくよ  
 往來わうらいもる出いてもあき  
 へ高山こうざん大湖たいこを知る  
 人ひとありのりが人民じんみん漸しだ  
 く増加ぞうかし次第しだい小國土ここくにち  
 を拓ひらき廣ひろげ霧きりも隨まつて

晴き孝靈天皇の御守ふ至て始て富士山の  
高山なるを知り多るあらん故に始て湧  
出しつるとりふら始めて見出したるを以  
ふあともあるべし總て一國の大きき高山  
まゝの大島の湧出する理は信難し

○山移り或は島の動く事

山の移りしあはと唐土の書よは間々あはれ  
り通鑑大全とりふ書ふは元ノ仁宗ノ延祐

二年五月ノ夜疾風電北ノ山南ニ移ル  
とあり又或書ふは山移ル者ハ直臣亡シ伎  
臣用ラル五年ノ内天下兵アツテ社稷亡  
杯とゆれとも真ふ山の遠く移り行べき理  
ふし是ハ山裂け或ハ陥る事などありて別  
ふ堆積し阜岳を為したるのや文人の癖  
として事大造に記しするふらん然し亞非  
利加洲の大沙漠中にて風起る時の波を

起し一時小大山を登り一日の間も風の  
 方角よりつて西より移り南より轉る處より  
 と又鳴の動くといふも波よりつて此所の  
 鳴を崩し彼處より又堆き島を生じたる所の  
 の日本越中の國負婦郡の蓮臺野といへる  
 處より百間四方程の池あり其池の内より十四  
 五間許の鳴ありて草木萎々たり此島より風  
 不隨て流動し北風より南の岸より寄り西風

より東の岸よりなる由て俗に之を浮嶋とい  
 ふと余いま之を見む其理如何んを志す  
 也

○地中より禽獸を生むる事

禽獸自然に地中より生むる事ありとて  
 漢土の書より之を載せる所の多し家語と  
 して書しへ季桓子井ヲ穿ツテ羊ヲ獲タリ  
 と云くまゝ異物志より云ふ秦之北附庸ノ小

One day at hado

邑ニ羊アリ自然ニ土中ニ生ズ其萌シト欲  
ルヲ候テ牆ヲ築テ之ヲ繞ラス獸ノ為ニ食  
ハル、ヲ恐テ也其臍地ト連ル割絶スル片  
ハ則死ス物ヲ撃テ之ヲ驚セバ乃チ驚鳴テ  
臍遂ニ絶フ則水草ヲ逐テ群ヲ為ス杯と以  
り其外の書小々皆真の羊地中より生むる  
とき故小人の其説を信じて奇事ありとす  
然るども洋書より始めて始めて其確説を得

たり今上より一處の羊ハ真の獸ニあらず  
則ち草は羊小似たるものあり唐山の諸書  
ニ論むるが如きは皆文人墨客の誤り傳へ  
て真の羊は地中より生むるものと思ひ其  
余附會の説を設け真事やりし識せしあ  
ん今洋書中の大略を述べて其惑を解くべし  
或洋書一曰く韃靼部中サメタ等の地より  
種の奇草を産むるを以て羅甸語りてアグニ

二二二



ス。シケイチキム  
 羊ありシケイチキ  
 古の北方の国に  
 名ありと  
 又英語  
 あてタルメリラム  
 て韃靼羊  
 といふ  
 人へ名けてボラメ井  
 スといふ是其地の土  
 人一種の西瓜に似て

少一少ある種子をすけが即ち一の草葉を  
 生じ其葉中より莖を生じ高さ三尺許に至  
 ば一の羊に如くある形の物其莖に纏ひ  
 生じて其臍を茎と相連り其頭および手足  
 等皆具はりまゝ其頭の角を生じべき所  
 の一束の毛叢生じて稍高く恰も角の如く  
 あり其羊熟する後つて莖を次第に枯れ  
 身への皮毛を生じ内ふを薄き白膜より其



毛を柔くして巻曲愛をべし其近傍四面  
 生る所の他此諸草を日を追て盡く悉く  
 腐る蓋し羊の食へる小似たり入るし其近  
 傍の草を刈る時を此羊も即ち枯るはる羊  
 切れば赤き液汁ありて出づ恰も血の如  
 し其肉を味ひ蟹の肉に似て甚ぶ耳味あり  
 鞋靴人の此羊の皮を採り中とありて頭を  
 抱えりるひを衣服玩器とあはせり此羊熟

頃よの狼来りて是を啖ふゆへよ土民  
 心を用ひて諸の野獸を防ぐると甚ぶ密な  
 りとりふき奇草とりふべし

○木化して石とある事

木の化して石と為りしと諸書に見へて  
 日本ふも所々少くは就中奥州の深山  
 よの澤山ありと此深山よて樹木を伐り湿  
 地よ十年余を置く時を其地ふ接したる所

化石とある樟木或は松木より別して多し  
 と是の石とや名の質此地より多き由あり  
 又英國の内ナルエスボロース城の古跡の  
 近傍に一奇洞あり之をゾロピンクウェール  
 とり其深さ数歩に過ぎ其一方を直立の  
 岩石にて其頂上より草木生茂なり此岩  
 上の邊より常に露滴點々として恰も兩中  
 の如し人試し百物を此泉中へ投ぎしに皆



化して石質とあり漸  
 く化して堅石とや  
 曾て鳥の巢より保  
 ち其周囲より苔並  
 ふ枯たる草木の類  
 り羽毛乃至は皆  
 共化して堅石と為  
 きたるものありと

○木を伐て血の出る事

古木コキのハひるヒル神木シムキ杯ハシを伐キて血チは出デしシと  
 へヘくク倍家ヘイカの云イハひ傳ツクふる所トコロありアリ後漢書コウカンシヨに  
 靈帝レイテイノ中平元年チュウヘイガンネン樹中ジュチュウニ人面ニレンメンアリ鬚ヒゲヲ生シヨ  
 ズ之ノヲ伐キレバ血チヲ出ダストありアリまマ〜或書ワカシニ  
 ハ吳ゴノ時トキ敬叔ケイシュク大樟樹ダイシュウジュヲ伐キル血チ出デヅ中チュウニ物モノ  
 アリ人面ニレンメン狗身コウシン敬叔ケイシュクガ曰イハク此コレ鼓候コウコウナリ乃ソノチニ烹シ  
 テ之ノヲ食クラフ味アジト狗イヌノ如ニシトなりナリ是レハ苗マメノ

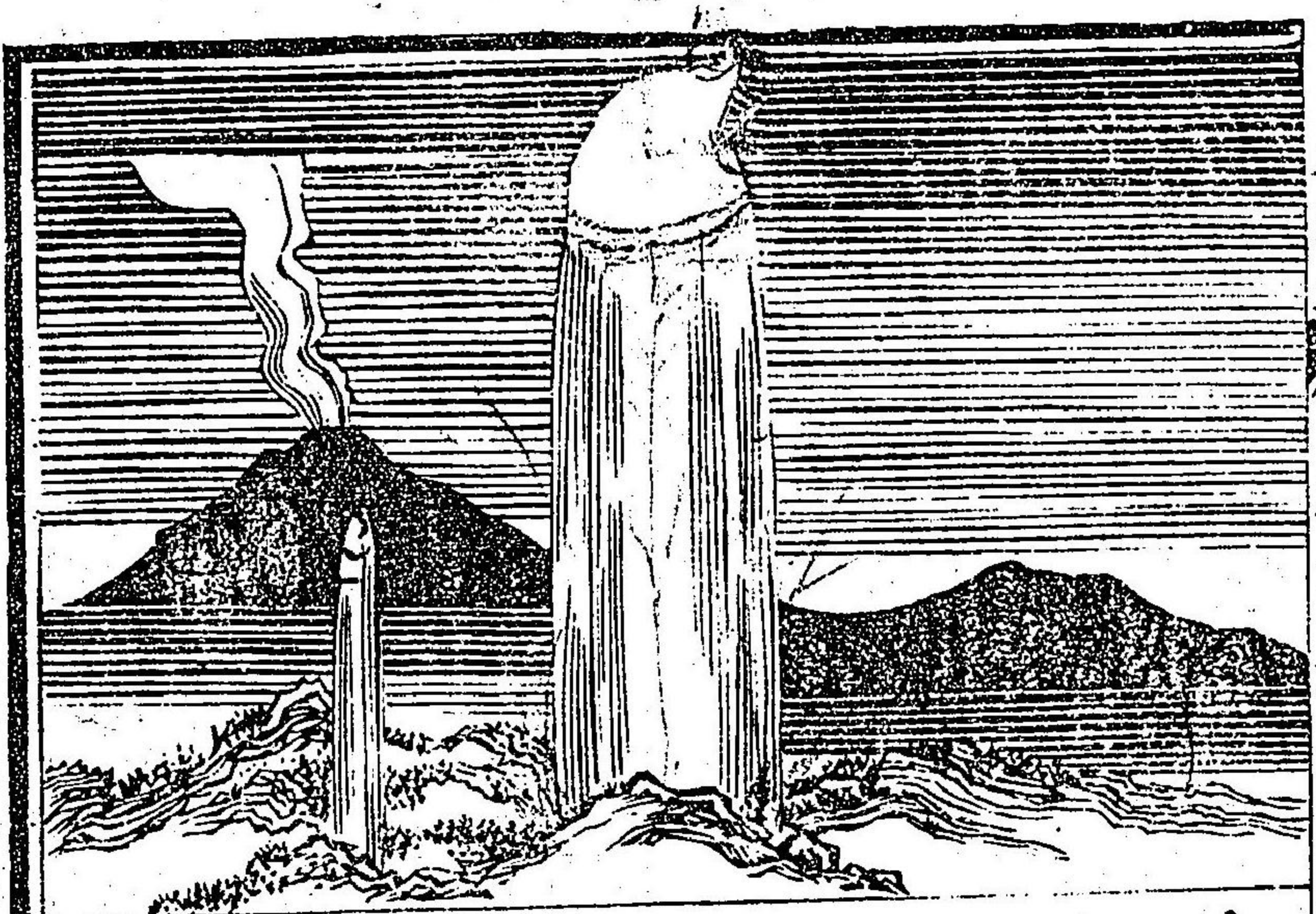
てもあり〜アハ恐オソクバ附會フクワイの説セツヤクん又マタ  
 樹キを伐キて血チの出デ〜とトいハふフ諸書シヨニ見ミゆル  
 と昔ムカシ老木ラウキありアリと是レバ老木ラウキ大木ダイキハ中心チュウシンニ空カラ  
 洞ツツの所トコロありアリて木キの液汁エキジュ膏脂コウシあハど此處ココハ溜タマ  
 り年トシを經スて溼熱シツネツハ為ナるル赤色セキシキとトなりナリたタらラゆユ  
 の木キ伐キたタふフよヨつツて流ナ出デ〜と血チ出デ〜と  
 思オモひヒ〜のノあらアラんン木キノノ赤セキきキ液エキ  
 汁ジュ出デ〜とトいハふフ其外ソノタラシ石イシを切キ〜血チ出デ〜の

又ハ泣キ一とありし杯と云ひ傳ふとも  
皆人の想推よして木石の魂魄あるよつ  
とぎさへー

○沸湯泉の事

地中より熱湯此湧出るハ和漢萬國共ニ沢  
山ありとありと人敢て奇とせば偶火の出  
るよとわれバ大ニ怪しむるもども火ぢく  
んバ水の沸く所以あり温泉ハ皆硫黄ハ或

ハ石炭の燃るより生むるものあり又右硫  
黄石炭ハあくとも地ハ極底ハ一面ニ火あ  
るゆへ火山より火を噴くも温泉の吹出る  
も其理あり唯世界ハ稀あるを亞米利加洲  
の内ニアイスランドとつ大嶋中の噴湯  
泉あり是ハ小山の中腹より白練ハ如子熱  
湯を空中凡二十丈の間ハ噴出ハ其景色実  
ニ奇ありと又温泉中ハ魚ありて遊ぶと



始興記とゆふ書ふ見  
 へたれども強て虚説  
 とるゆひ難し日本の  
 温泉中より虫の居る  
 のありといふ又有  
 馬が湯を塩水あきと  
 是の地下の水脈海中  
 ふ貫通して其氣往來

きるあらん

○潮水の變

潮水の満于日月此引カふ從て變異ふ  
 潮の満于の事天文去きどる大山の  
 峯ふ水の満于を潮の或は鹵水の  
 拾遺記とゆふ書ゆの柳州ノ昔相嶺ノ麓ニ  
 潮井アリ一日ニ三タヒ満于スとゆり又都  
 兒格の近海よりエウリスとゆふ所あり潮

*The mound is high.*

一日、七次を古賢アリストある者其理を  
 究めんとして遂に水中に死せしむる日本  
 吉野金峯山の上より潮井のりとは是等の皆  
 水脈の遠く海水と相連り其覆道の模様は  
 あり海水の于て後山の湖に閉通し其水少  
 し于んとする時、海に満潮に迫らるる  
 湖もまた満水する等の出るとして一日、三  
 四回も水の満ちるをみるありんと○日本康安

元年七月廿四日大地震阿波ノ鳴門磯ニ潮  
 引去テ陸トナル須臾ニ又満来テ洪波ニ没  
 死スル者数千人とあり西洋にても大火山  
 の突きたる前より近隣の井より水一滴もあ  
 りしとぞ○又都兒格國の内ふせいパリユ  
 スとりの嶋あり其中に奇湖あり之を死海  
 とし其水清浄にして甚く鹹く大小の魚  
 類皆生むるよしあり其岸畔より常にお塩を

の凝固を見る又試み物を投込ふ至て重石  
物も何れもかまひ沈みだ砂石の類皆浮ぶ其  
近傍に到り其蒸氣に逢ふ時の衣袂も纏  
る卑溼を覚ふ其後二三日を經て其衣皆腐  
ると實に奇なり不察

天變奇談卷之下 人の部

東江樓主人 纂輯

○ロク口首の事

往古より世倍々ロク口首として首の長く伸  
ぶ者ありと云傳ふ是固より附會の説なり  
て信する不足らばとりてども何れ其出處  
の種々古書を尋ねるふ此事を載

まるりの少うらひ瀛涯勝覽といふ書小南  
 方ニ落頭民アリ其頭夜ニ至レバ身ヲ離テ  
 飛テ諸方ヲカケル耳ヲ以テ翼トス曉必ス  
 歸ル又夷頭民ト号スといふ博物誌と  
 いふ書小呉ノ朱桓將軍ノ家ニ一婢アリ毎  
 夜卧テノチニ頭飛去リ天窓ヨリ出入ス  
 といふ書小搜神記といふ書小台城國ニ尸頭  
 蠻アリ本人家ノ婦人ナリ眼ニ瞳ナシ人皆

コレヲアヤシム夜寢テ頭飛去テ人家小兒  
 ノ糞ヲ食フ曙ニハカ  
 ヘリテ身ニ合ス夫コ  
 レヲ知テ頭去テ後身  
 ヲ別ノ處ニ移シ置ク  
 頭カヘリテ三度迄地  
 ニヲチテ愁ヘ其身息  
 喘テ急ナリ將ニ死セ





ントス身ヲ本ノ處ニカヘセバ頭合シテ異  
ナルナシ是者アラバ官ニマフスベシ  
ラク者ヲバ一家ヲ罪ニ行フベシト法度ア  
リシ杯とあり又りふ能ク鼻ヨリ飲モノア  
リ頭能夜海ニ飛テ魚ヲ食ヒ曉又身ニカヘ  
ル者アリ杯と真事やうふ記したれども固  
より理ふあつてあれあきあつと也元の陳學  
とりふ詩人の詩ニ鼻飲如瓶頭飛似轆轤

とあることり之をロクロクビとりたる  
もの何より初編珍奇物語よてりひし  
如く漢土の詩人等例の文飾の為は種々虚  
説を交ひたるを後代に至り之ニ想像を画  
す遂ふ真やうふ為したるものやうな余  
此ロクロクビの事を洋人ニ質ねたれば大  
笑へり

○人面瘡の事

人の足杯よ人面を生ト能く飲食（ヒト アシハヒト）し（ヒト）て  
 言語（ゴト）をさるゝのゆり（ヒト）杯（ヒト）と古俗（コソク）の云傳（クワタ）あり  
 所（トコロ）りて芝居（シバ）うゝ居去勝（イガリウウゴロウ）五郎（ゴロウ）の足ふ（アシ）即  
 ち此疾（コノヤサ）あましとき余大（オホ）よ之（シ）を奇（キ）あり思（オモ）ひ  
 し見聞紀訓（ミミキケン）とりの書（シヨウ）に此事（コト）ゆり或道士（アルドウシ）  
 人面（ヒトメン）ヲ生（シヨウ）ズ足（アシ）ノ外（ソト）ハギニアリ瘡（シモ）ノ口唇（クチクハ）ニ  
 似（ニ）テ舌（シタ）アリ齒（ハ）ナシ能言（ヨクモノイ）ト食（シヨク）ヲモトム瘡（シモ）口  
 ヲ開（ヒラク）片（イタ）ハ痛（イタ）甚（ハナカ）シ口閉（クハトガ）テ復甦（マタヨミカ）ル之（シ）ニ酒（サケ）ヲ飲（ノマ）



しムル片ハ瘡（キズ）ノ四周（ハシリ）皆紅（ベニ）ナリ食畢（シヨクヲハル）片ハ口  
 ヲ閉（ト）ヅ痛（イタシヤ）稍可（ナ）ナリ但膿（ウツ）血（ケツ）ヲ流（ナ）シテ止（ヤ）ズ每  
 日（ヒ）一二度（ド）発（ハツス）ル（ト）常（トコ）ナ  
 痛（イタ）ミ苦（クルシ）ム（ト）甚（シ）シ（ト）  
 ありき（ホレ）ホ（ホ）フ  
 本書（ホンショ）よ江左（エサ）ニ商入（シヨウ）ア  
 リ左ノ膊（ヒタリ）ノ上（カミ）ニ瘡（キズ）ア  
 ヲテ人面（ヒトメン）ノ如（ニ）シ亦他（マタ）カ

大  
 卷  
 二

ノ苦ナシ商人戯ニ酒ヲ以テ瘡ノ口ニ滲入  
レバ其面赤色ナリ物ヲ以テコレニ食レム  
レバ亦能食フ多食フハ肉脹起ルコレニ  
食レノガルハ臂痺ルハ一ヲナスとあり  
是等ヲ考ふる時を全く虚説ニゆめば古  
ハ生ゼーあるもゆりたねども近世に去れ  
あき事ありといふ又或人の説ニ此人面  
瘡と唱ふるは瘡の象人の面ニ似て眼口鼻

の様子所々の飲食まるといふは全く附  
會の説ありといふ

○男化して女とある事

男化して女とありし事の日本は古俗に余  
りまゝ之を聞き固より理におりて去れ奉  
き事なり然るに漢土の書に之を載せらる  
りの少あり依て其略を茲に掲げ博識の  
高説を待つ漢書より哀帝建平年中豫章下

云所ノ男子化レテ女子トナリ人ニ嫁シテ  
 後一子ヲ生スニヨウとゆりホンソコラモク本草綱目ホの静キ  
 樂縣ノ民李良兩ト云モノ妻ヲ張氏ヨリ娶サ  
 リ巳ニ四年ヲ経タリ後家貧ナルニ因テ其ヨウ  
 妻ヲ出シ自人ニ備ス隆慶元年正月ニ至テ  
 偶腹痛ヲ患時時ニ起リ時ニ止ム明年九月  
 腹大ニ痛テヤマズ四月ノ内ニ至テ腎囊覺  
 へズ退縮ミ腹ニ入り變テ女人ノ陰戸ト

ナリ次ノ月經水亦通ジ始テ女ノヨソヲイ  
 換フ時二年二十八ナリとありコト洪範  
 五行傳晋書南史唐書續漢書等ニ之等の  
 古トを載の是恐んくら虚誕とありん去ことど  
 も斯ろく数書ニ記まるもまま不審んあり

○啞の事

人生しんをあららテテ耳聞みへぎれの其人そのの  
 ありば啞ああり人の言のふらら嬰兒あの時とり他た

人の言語を聞きしを耳に聞き漸次舌唇齒喉  
等の運動を覚ゆるより音聲を上下強弱  
にて辨別せしむるありのあり耳聞へざ  
れば舌唇等の運動を覚ゆる事とあきゆん  
音聲を辨別音調を附る事とを志すざるの  
と啞とリへとも全く音聲の出ざるより  
む故に兒童の未だ古等の運動巧あらずる  
時の其音聲とく辨難し之を舌の回らぬ

とリゆ因て西洋ふての啞院とく啞を教る  
學校あり是の啞子數百人を集て先初學の  
者より指の形を色々して西洋伊呂波二  
十六文字の記号を教つ夫より他人の言ふ  
時の唇舌齒喉等の運動振を見習はせ始む  
の内を唯言ふ人の口は運動振を真似せし  
の事あれども自然に舌の運動を覚へて必  
し音聲を發る事とを得ると已に音聲を

Tokyo Library

六要一 卷之三

癸るあとを得ば他人の言を耳に聞かずと能  
りばといつども唇舌は動機を見て其語を  
解し共ニ談話するを得ると又耳聞こゆる  
の啞々發声機關の不具あるより舌の運  
動を覚ゆるども音聲を發し難しといふ

天變奇談 大尾

官許  
東江樓藏版



書

芝三島町

和泉屋市兵衛

通油町

藤岡屋慶次郎

馬喰町

森屋治兵衛

全

山口屋藤兵衛

肆

両國吉川町

大黒屋平吉



待 43  
館籍  
234  
函架號冊

教  
本  
談

教  
本  
談